

# 災害 (1) 東日本大震災の研究

## 震災被害と精神的健康 ——被災リスクの高低を考慮した分析——

日本女子体育大学

石原英樹

### 1 目的

自然災害の場合、被災リスクは誰にとっても等しいイメージがあるが、実際の震災関連の調査分析によると、震災の被害（金銭的被害、物的被害）や被災者意識は、様々な条件や属性によって異なっていることがわかってきた（村瀬 2013, 立教大学 2014）。もし被災リスクが人によって等しくなく特定の人が被害に遭いやすいとすると、震災被害の影響や復興に寄与する活動の分析結果にバイアスがかかってしまう可能性がある。本研究では、震災被害の有無とその後の精神的健康との関係を検証するが、その際、被災の傾向スコア（被災リスク）を算出し、その高低によって対象を分けた上で、震災被害の効果と関連変数を検証する。

### 2 方法

本研究で使用するのは、立教大学社会学部が東北大学と共同で行った 2011 年 11～12 月に実施された「生活と防災についての仙台仙北意識調査」の個票データである。震災被害としては自宅損壊の有無と主観的な被災者意識に着目する。また震災後の精神的健康指標としてはうつ状態に関する 6 項目の合成変数を用いた。まず自宅損壊および被災者意識の傾向スコアを震災前の状況変数を用いて推計する。次に傾向スコアを用いて、対象者を震災被害の高・中・低リスクグループに分け、男女別に調査時点のうつ状態指標を、実際の震災の被害の有無あるいは被災者意識で説明する重回帰モデルを推定した。そのほかの独立変数として、うつ状態を緩和する効果が期待できるいくつかの人間関係に関わる変数—配偶関係、近所づきあい、インターネットの利用—を投入した。

### 3 結果

自宅損壊や被災者意識はランダムに生じたわけではなく持家に住んでいた人や高齢者、居住年数が長い人に偏っていることがわかった。被災リスクの高中低別、男女別に、自宅被害の有無が震災から 8 か月後の精神的健康と関係しているかをみると、高リスクグループの男性では関係が認められないが低リスクグループでは統計的に有意な正の関係が示されるなど、リスクの高低によって関係が異なることが分かった。また未婚は多くのモデルでうつ状態と正の関係を示し、中リスクの女性では近所に相談相手がいることがうつ状態と負の関係を示した。

### 4 結論

震災被害の影響は、もともとそうしたリスクが高いかどうかで異なる可能性がある。被災のリスク自体を低めることが何よりも重要であるが、それでもなお被災した場合は、被災リスクが低かった場合のほうがむしろ精神的ダメージが強い可能性を示唆する結果が得られた。そうしたダメージを緩和する条件も被災リスクの程度によって異なっており、実際の被災のみならず被災リスクの視点も有効であると思われる。

### 文献

村瀬洋一.2013.「震災後の不安感と被害金額の規定因—被害と社会階層に関する仙台仙北調査の計量分析—」『選挙研究』No.29-1, pp.102-115.

立教大学社会学部社会調査グループ.2014.『生活と防災についての仙台仙北意識調査報告書—震災被害と社会階層の関連』2011～2013 年度立教大学学術推進特別重点資金（立教 SFR）東日本大震災・復興支援関連研究 成果報告.